私の体験記（十日戦争）

福原次郎
東中野一丁目

支那大陸や南方で幾多の戦場を乗り越えて来た歴戦の勇士の体験談と比して余りにもおこがましいが、まさかと想われた日ソ戦、それも僅か一週間余で終戦、武装解除された、その間一瞬のうちに尊い命を失った多数の戦友のため、拙い文ではあるが四〇数年経た今日、遠い昔日の記憶を辿りつつ敢えて綴った次第である。地名、日時に多少の誤りがあるかも知れないがお許し願いたい。

私の所属する一二六師団歩兵二七七連隊は、東満の国境地帯、半載河の守備隊から移動し、ここ東満の八面通で新たに連隊が編成された。私は歩兵砲中隊の連射砲小隊で、隊長は若い見習士官であった。六月に入って、部隊は更に後方の穆陵（リン）伊林地区に移動し、山間部で連日数箇所に砲座や塹壕（ムイ）を作る、然も突貫作業の連続で、兵隊は疲労困憊の連続で、狭い幕舎で過ごす夜など話し合う元気もなかった。後で知らされたが、この山間地区に敵との抵抗戦を敷くことにあった由だ。

そして運命の八月八日から九日未明にかけて、満州では一部を除き雨が断続的に降った。この山間部も時々強い風雨が幕舎をゆるがせた。九日朝食の時は雨も上がり靄（もや）が立ちこめていた。今日もまた辛い一日かと思っていた時に、突然非常呼集ラッパが響きわたった。スワ何事かと全員整列すると、中隊長より「本九日未明、ソ連が満州国全国境線にわたって攻撃して来て戦争状態に入り、一部は突破された。半載河の残留部隊は、敵の猛攻にあい勇敢に戦った後全員戦死したとの情報が入った。部隊は直ちに後方に転進する」。後の言葉は聴き取れなかったが、隊員は余りの突然の事で慄然としていた。まさかこんなに早く、然も不意打ちに攻撃してくるなんて、夢にも想わなかった。部隊は牡丹江へと後退すべく、今迄に突貫作業して作った砲座、塹壕も放棄して行軍せざるを得なかった。

中隊の武器は対戦車隊の為、連隊砲二門、速射砲二門のみで小銃は持たない。隊員は帯剣のみであって身軽ではあるが、心細い。四門の砲と、弾薬は軍馬が曳く。夕刻から雨がまた降り

始め、それが時には強く八月とは言え肌寒く、合羽も靴も水びたし。道路はぬかるみ、凹地にめり込みすること何回も。その度毎に砲や車両を数人の兵で抱えてやっと進む状態で、疲労と空腹でフラフラ、黙々と脚が動いているだけである。翌十日、早朝から前日の雨が嘘の様な快晴であった。朝食小休止、ぐったり。あちこち雨水がたまって寝転ぶ訳にはいかない。これから先どうなるか、不安が一杯。話し合う元気もない。一時間してから出発。昼前、急に後方が慌ただしくなった。ソ連軍が間近に迫って来たようだ。敵は東満の拠点牡丹江へと快進撃をして来ているのだ。中隊は早駈けで、丘陵地帯から山を降り広い谷間に到着、直ちに各砲を据え付け、何時でも応戦できるよう態勢を整えた。砲手は勿論古年兵、我々未熟者は弾薬運び。敵の進撃路は、我々が降りて来た道路しかないので、その一点を凝視していた。

どの位経っただろうか、彼方稜線にかすかに、黒い固りが見る事が出来た。距離は千メートル位いか。それが二～三個となり次第に大きくなってくる。丘陵から徐々に下って来る重戦車の群れがもうはっきり望見できた。しかしまだ我砲から発射されない。至近距離まで待っている。私の胸は激しい鼓動と、これからの砲撃戦の行方に不安が募る。大分近くなった時、我が砲四門から一斉に発射された。確実に命中した様だ。誰かが「やった」と歓喜が叫ぶ。だが戦車は微動だにしない。厚い銅板のため効果ない。また前進し始めた敵は、我軍の布陣を探っているのだろう。そのうち停止したのか、破壊されたのか、動かなくなった。それも三両が同じ状態だ。多分擱座したのだろう、後方に布陣していた戦砲連隊からの援護射撃が功を奏したのだ。敵の歩兵の姿は見えない。中隊は直ちに布陣を解き、早駈けで後退した。

平坦で広い丘陵地帯に出ると、援護射撃をしてくれた野砲数門の残骸があった。戦車群は、我が砲より野砲を目標として、激しい砲撃戦を展開した事は確かだ。道端には、軍馬の死体があちこちに散乱して、臭気が漂っている。この惨状を見廻しながら行軍中、上空で爆音が聞こえてきた。友軍機と期待して上空を見上げると、敵機が二機低空で機銃掃射をしながら飛来してきた。立木が一本もなく、身の隠し所もない。死はとうに覚悟している。どうにでもなれと行軍を続けた。単なる威嚇だったのだろう、死傷者は出なかった。

二時過ぎだったか、広い草原に出た。ここに落ち付くのか、大休止。陣容を立て直すのか、野営。十一日、日中は、両軍とも全く動きがなかったので、疲れは充分取れ、元気を取り戻すことが出来た。その夜は満天の星が輝き明るい。突然ゴーと音がしたと思ったら、丘の頂上にパーと花火が舞い散った様に一面が明るくなった。曳光弾だ。瞬時に十発近く打ち込んできた。昼間二機が飛来し偵察したのもこの為か。多分彼の地に本部が

あるのだろう。余りの美しさに恐怖心も涌かず、花火見物をしている様な気分。真夜中になって集合命令が出され、中隊は部隊と共に転進することになった。これ以上駐留することは危険と見做したのか。誰かが言う「連隊砲の小隊長が見えない。何処へ逃げたかな」。まさか隊長が敵前逃亡、でも戦死はしてない。多分初めての激しい砲撃戦で怖じけたのであろう。夜を徹しての後退。戦況不利な時はこんなものか。せめて勝ち戦をして見たい。牡丹江市に近づいた様だ、もう白々と明るくなってきた。

牡丹江市は、浜綏線にある、日本人九万人が居留する東満随一の大都市でもあり、軍事上重要拠点でもある。郊外を流れる河に架かる海路橋を渡った、主要道路沿いの広場に集結したが、各中隊の位置等我々には分からない。朝食兼昼食後、新しい下着が支給されさっぱり。中隊は、何時敵が現れてもと各砲・弾薬等総て応戦態勢を敷いた。連隊砲小隊は、中隊長が指揮を執っているらしい。

二時過ぎだろうか、前方で機関銃からの発射だろう、激しい銃撃音が響いてきた。つられた様に、速射砲からも一斉に打ち出された。敵軍の進路は、我々が通ってきた一本道だ。遮蔽になる様な大木はなく、斜め前方に満州人家屋が二軒あるのみ。その方向に、連隊砲隊が布陣している。二、三発の炸裂音が響いたら、一瞬のうちに土砂が舞い上がって、家屋は瞬時に崩壊された。凄まじい威力だ。激しい砲撃戦が続いている中、遠くで「中隊長戦死、山中曹長代わって指揮もまた戦死」との怒号が聞こえた。連隊砲は全滅だ。やがて戦車らしい轟音が、かすかに聞こえてきた。海路橋を渡って来たか。戦意は旺盛であったが、隊員は散り散りになってしまった。その中で戦車攻撃のため決死隊を出す事になり、兵十名ばかりに、それぞれ棒地雷、破甲爆雷、手榴弾を持たせて、古年兵が指示している。「沿道の溝に入り、戦車がきたら、キャタピラを狙って投げるか体当りしろ。臆病にだけはなるな。成功させろ」と、ろくな教育もしてない兵に、随分無理な事を命令しているなと思った。私は、小隊に近い壕の中で、ひたすら成功を祈った。

今度は一斉に中隊陣地に砲撃を加えてきた。発射音、炸裂音か驚くべき速さ。土砂が舞い上がって立ちこめた。四門の砲はおそらく粉砕され、多数の戦死傷が出たであろう。敵戦車四両が前進してくるのが望見された。五、六〇メートルの至近距離に迫ってきて、突然停止状態になった。私達四、五人で匍匐前進し、見極めると完全に擱座している。決死隊が敢行したのだ。廻りには一人の兵隊の死体があるのみ、他は見当たらない。おそらく吹き飛ばされたのだろう、壮烈無比の戦死だ。

小隊長に報告すべく戻った所、二門の速射砲は破壊され、周囲には誰一人居ない。戦死か後退したか、我々五人は一瞬戸惑ったが、「もう敵歩兵も近づこう、この場は後退せざるを得な

い」。誰かが言うと後は低姿勢で一目散に後退した。身軽な為か、その早いこと。夕闇せまる海林飛行場を迂回しながら無我夢中で走った。五人は散り散りだ。やっと小高い山の麓に辿り着いた時は、夕陽も落ち、辺りは人の気配もない。幸い月夜であったので、周囲の状況は把握できた。

山に入るか、街に出るか、思案にくれていた所、下方よりどやどやと足音がしてきた。「おいどうした。お前も逃げて来たのか。何処の部隊か」。下士官と五、六人の兵が話し掛けて来た。今更部隊名を名乗ってもと、中隊が散り散りになり、皆目分からず独りになった事を話し、思案にくれている状況を言うと、「街は敵で一杯、危険だ、山に入るしかない、同行しろ」と、まるで命令だ。私も、独りより多い方が心強いので従うことにし、未知の山中に入った。

長い一日は過ぎ、十四、五日は高い山ではないが、森林に覆われた山中をさ迷いながら、途中何処此処で兵隊がいて、かなりの数にふくれた。食料は、不在の満州人家屋の食料でなんとか凌いだ。十六日昼頃、大きな声を出しながら近づく民間人がいた。「お前達、戦争は十五日を以って終結した。敗戦の詔書が下されたのだ。部隊は武装解除され、この山の下の道路を牡丹江に向かって行動中だ。直ちに所持している武器を放棄して下山し、所属部隊に復帰せよ」。どうも特務機関員らしい。近くでは、小銃やら日本刀まで焼け出された煙が立ちこめている。私は信じるしかない。涙が止めどもなく出る。帯剣を火中に放り投げて下山した。

道端で待機していたら、間もなく小隊長を始めとする中隊の列が現れた。この時程喜怒哀楽の情にふけった事がない。小隊長が近づいて、「おい、福原生きていたか。戦死したとは確認出来ず、行方不明の扱いになっていた。本当によかった」と、握手したら涙ぐんで言う。同年兵が微笑を送ってくれて、「中村は線路沿いに逃げて機銃掃射でやられた。梅田は右足を負傷して戦列を離れた。多分ソ連兵に捕まったろう」と古年兵の消息や戦闘状況も知らせてくれた。中でも中隊長の戦死は壮烈極まる状況だった様だ。部隊は、ハルピン市を防衛すべく、横道河子辺りまで行った時、武装解除されたらしい。一週間程の日ソ戦もこれで終り、敗戦の惨状が脳裏から離れず、やがて、日本軍施設の広大なる敷地の収容所に入った。そこには数千人とも数万人ともの日本兵がいた。